

# 素顔拝見



医歯学総合病院・助教  
(義歯(冠・ブリッジ)診療室)

川崎 真依子

こんにちは。義歯(冠・ブリッジ)診療室の川崎真依子です。歯学部ニュースでは今まで、「大学院入学にあたって」、「大学院修了にあたって」を書かせて頂きましたので、3回目になります。そんなに波乱万丈な人生を歩んでいるわけでもありませんので、書く事が乏しくなっている気もするのですが、前回の続きと言う事で最近の事や、これまで書いていなかった事を中心に書きたいと思います。私は、日本大学を卒業してから新潟大学に2年間研修医としてお世話になり、そのまま大学院まで進んでしまい、今年(平成22年)の3月に大学院を卒業しました。そして、今年の4月から同分野の助教として働かせて頂いております。と言う事は、3月31日まで学生で、4月1日から突然教員と言う立場になり、かなり混乱しました。総診ライターとして学生さんを指導しなくてはならず、3月中に何回か魚島教授の指導を見学したのですが、教官としての視点と言うよりも、自分が研修医の時にタイムスリップしたようで、自分まで怒られているような複雑な気分になりました。さらに、私は他大学から来ているので総合診療部のシステムからして??? でしたから、未だに周りの先生に質問する事が多々あります。現在は、総診ライターとして、週に何回か学生さんに指導するようになり、「教える」と言う壁に日々ぶち当たっています。学生さん達が診療で迷う事もありますが、「なんでこんな事で迷うのかな?」と厳しく思うよりむしろ、私もちょっと前に経験した事だったりすることもあり、「あ〜、わかる、わかる。」と、実は共感している事は、ここ

だけの話です。しかし、「共感」と言うのは、ともしれば「甘さ」にもつながり、学生との距離が近すぎてしまう事が問題です。私が研修医の時代は、とても厳しい先生がいらっしゃり、毎日毎日、怒られない日はないほどでした。その先生に教わる時の緊張感は、未だに忘れられません。その当時は、辛さと緊張感で頭が一杯になりながら診療していましたが、今にして思えば、あの緊張感のおかげで毎日真剣に取り組めていたように思います。教育がどう言うものなのか、まだまだ私にはまったく掴めていませんし、そんなに簡単にわかる事ではないと思いますが、まずは私にとって「厳しさと優しさのバランス」が課題だと思います。厳しくも優しくも私に教えて下さった多くの先生方の言葉を思い出しながら、日々奮闘しています。

ところで、話は変わりますが、最近の学生さん達は、私の学生時代とは、やはり違うようです。先日、6年生との懇親会があったのですが、「皆は、大学終わったら何をしているの?」と聞くと、男子学生は「終わったら、家に帰ります。」との返事でした。確かに家に帰るのでしょうか、部活とか? 飲み会とか? まっすぐ帰るの? と疑問符が浮かびましたが、どうやら本当にまっすぐ帰るようでした。真面目なのが流行りの草食系男子と言うものなのかわかりませんが、なんとなく大人しいなあと言う印象でした。対照的に、二次会のカラオケに残ったのは女子学生だけでした。最近、動画で音楽を聴くのでしょうか、みんな歌うだけでなく振付けまで完璧にマスターしていて、笑顔がキラキラしていました。世間ではアラサーと呼ばれる世代としては、そんなジェネレーションギャップが楽しい反面、若干息切れする今日この頃です。

\*



助教  
(生体歯科補綴学分野)

## 秋葉陽介

平成21年4月より生体歯科補綴学分野の助教に就任しました、秋葉陽介と申します。

素顔拝見ということでご挨拶をかねて略歴と自己紹介など。

出身高校は宮城県の仙台第一高等学校です。入学には苦労しましたが、東北大学歯学部を無事6年で卒業しました。しかし学生時代には日中の勉強よりも夜の課外活動に熱心だったために、もうすこし勉強したいと考え、東北大学大学院加齢歯科学分野に大学院生として入局しました。学位研究は東北大学医学部細胞組織学分野にお世話になり、細胞内シグナルセカンドメッセンジャーの脳内発現に関する研究を分子生物学的手法で行っておりました。旧態依然で月月火水木金金、24-7、医局に住んでいるのか？ といった大学院生活の後、学術振興会特別研究員を経て加齢歯科学分野に在籍し、学位研究時代の縁でNew York 留学の機会を頂き、パーキンソン病における再生治療の研究をCornell Medical CollegeとNew York Universityで4年間やっておりました。現在、縁あって新潟大学で優秀な医局の先生方と、魚島教授の厳しくも温かいご指導の元、忙しい日々を過ごしております。自分にとって激動の20年も文章にするとこの程度かと少々驚いてしまいますね。

趣味は、これといって無いのですが、体を動かすことが好きで、大学時代はバスケットのサークルに入っていましたし、友達とフットサルなんかもやっていました。仙台は良い波が来る場所もあり、良いスキー場も近く、横乗りモノは大好きです（どれもこれも上手いとは言いません……まさに下手の横好き）。もっとも最近は運動不足と不摂生で贅肉をため込む日々です。お酒は強いほうではありませんし、利き酒ができるわけでもありませんが、日本酒、ビール、焼酎、ワイン、ウイ

キー、カクテル、好き嫌いはありません。高いお酒と美味しいお酒が大好きです。安いお酒でも皆でワイワイ盛り上がるのは好きです。読書、音楽の趣味は乱読乱聴、なんでもいけますが、あえて言うならJAZZとRock、SFと時代小説が好きです。80~90年代に青春を過ごした世代ですからアメカジとシルバーとレザーが好きです。

研究では1人でPCの前で頭を抱えて考えるのも、実験室で実験するのも、医局で皆と研究の話しを議論するのも楽しくて好きです。臨床では治療方針を考えたり、議論したり、患者様に喜んでいただいている顔を見たりするのが好きです。学生実習に携わる機会もいただいております（!?）前の自分たちを見るようでほほえましくもありませんが、そこは笑顔を隠し、全力で厳しく（楽しんで）指導しております。

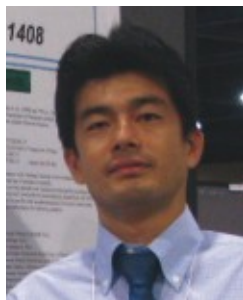
今ひとつまとまりがなく、分かり難いかもしれませんがこんな自分です。

新潟に来て研究、教育、臨床の場で多くの先生方とお話しさせていただく機会を得ています。現在、日常の診療と学生指導以外ではエピジェネティクスを用いた細胞分化制御、再生技術、移植治療における細胞超生、骨移植における生着などに関する基礎研究、金属アレルギー関連皮膚疾患と歯性病巣治療、QOLに関する臨床研究、臨床歯学演習など新規教育プログラム開発などを主にやらせていただいております。相談に伺った先生方、御意見をいただく先生方から情熱と意欲にあふれたアドバイスとご指導、ご協力をいただけることが非常にうれしく、また驚いてもおります（本学出身でもなく、どこの馬の骨かもわからない一助教の相談にも関わらず！ です）。今後とも教授をはじめ諸先生方にご指導ご協力いただき、臨床、教育、研究に研鑽を重ね、自分の得たものを後輩へ伝えていきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

最後に、「二補綴のアメリカ帰りの助教」ということで、赴任後1年たった今なお、僕と加来先生がよく混同されているようです。ビジュアルもキャラクターも結構違うと思うのですが、今回の二人の素顔拝見がいい機会だと思いますので、二人の原稿を読んでいただければと思います。加来先

生ともどもよろしくお願ひいたします。

＊



助教  
(生体歯科補綴学分野)

加 来 賢

2009年4月より助教として生体歯科補綴学分野でお世話になっています、加来賢(かく まさる)です。よろしくお願ひします。新潟に来てようやく1年と少しになりますが、生まれは福岡の北九州市、大学と大学院の10年間は東京、その後アメリカ合衆国のノースカロライナ州で5年間を過ごしました。大学院時代の元々の専攻は補綴科ですが、前任地のノースカロライナ大学チャペルヒル校デンタル・リサーチ・センターでは、ポスドク研究員として生化学・分子生物学的な基礎研究を行っていました。

ノースカロライナ州といってもあまりなじみがないと思いますので、簡単に御紹介させていただきます。ノースカロライナ州はアメリカ東海岸の中南部に位置し、日本の本州の半分程の広さの州です。気候は東京と似ていますが、湿気が少ない分過ごしやすく、四季も感じられ、大変住みやすいところ。州西側の内陸部にはアパラチア山脈が横たわり、世界遺産に登録されたグレート・スモーキー・マウンテン国立公園があります。東は大西洋に面し、ライト兄弟の初飛行で有名なキル・デビル・ヒルのあるアウター・バンクスは有名リゾート地です。ノースカロライナ州の名産はピーナッツ、蜂蜜、ヒラメ、と聞くとなんだか千葉県みたいですが、そんな感じのところ。他には、ペプシコーラやクリスピー・クリーム・ドーナツ発祥の地でもあります。

大学のある Chapel Hill 市は治安もよく全米でも住みやすい町のランキングにたびたび選ばれています。町は大学を中心に広がり、市民のほとんどが大学に関わっていると言っても過言ではありません。隣町の Durham 市には Duke 大学、

車で30分程度の州都 Raleigh 市のノースカロライナ州立大学 (NCSU) と共にリサーチ・トライアングルと呼ばれる地域を形成しています。その中央部に位置するリサーチ・トライアングル・パークには IBM、GE、GSK (GlaxoSmith-Kline) 等の大企業が誘致され、各大学間、産学間での協同研究も盛んです。日本の企業ではホンダ、興和、味の素、JT 等の企業もオフィスを持っています。

ノースカロライナ大学に限らず、米国の研究室の多くは、日本の一般的な講座とは違って、はじめから規定数のポストがあるわけではなく、PI (Principal Investigator ; 主任研究員) が獲得した競争的資金によって雇われる研究員の数が異なります。研究費からは研究室の維持費、人件費、PI 自らの給料までもが賄われるため、多くの研究費を持っている研究室ほど沢山の研究者を雇うことができる事になります。ですので、研究費獲得の成否は研究室の維持に直接的に影響してきます。実際、私も渡米3年目には、在籍していた研究室の研究費が更新できずに、新しい研究室を探さなければならなくなりました。幸い、共同研究先の矯正科の研究室に移ることができたので、強制送還にはなりませんでしたが。また、留学中に顎顔面口腔外科分野の飯田明彦先生が同じノースカロライナ大学に6ヶ月間来られていたのですが、まさかそのときには自分が新潟大学でお世話になることになるとは考えもしませんでした。

学生時代は硬式テニス部で、留学中もチームに入って大会に出たりしていたのですが、新潟に来てからは、なかなか機会に恵まれないうえに、体力の低下が身にしみるばかりです。できればまた定期的にはじめたいのですが、残念ながら現状では当分先のことになりそうです。

新潟では多くの先生方によくしていただき、よい同僚にも恵まれ、充実した時間を過ごさせていただいています。今後ともよろしくお願ひします。

＊



助教  
(摂食・嚥下リハビリテーション学分野)

辻村 恭 憲

平成21年7月より摂食・嚥下リハビリテーション学分野の助教としてお世話になっております、辻村恭憲と申します。名前は「たかのり」と読みます。当て字なのですが、実家に振り込め詐欺を装って「やすのりさん居ますか？」と電話がかかってきたことがあり、「たかのり」でよかったと思っています。出身は神奈川県のお小さな町で、足柄上郡開成町というところ。足柄山の金太郎と言えば、どんなところが想像できるでしょうか？そんな感じのところ。箱根や湯河原といった温泉街も近くにありますが。高校時代、ある友人が箱根からロープウェイで通学していました。手書きで作られた定期券を見て、ロープウェイに定期があるんだ！とびっくりしたのを覚えています。

平成17年に日本大学歯学部を卒業し、旧 加齢歯科学講座（現 摂食・嚥下リハビリテーション学分野）の助教授でいらした植田耕一郎教授率いる日本大学歯学部摂食機能療法学講座の大学院へと進みました。植田教授が「これからの歯科は明るい。君らがやるべきことはいくらでもある。」とおっしゃっていた言葉に惹かれての進学でした。昨今の歯科界は歯科医師過剰問題が叫ばれ、ワーキングプア等の暗い話題が先行する中で、まさしく一筋の光明を感じた瞬間でした。摂食・嚥下の現場は未だに嚥下障害に対する知識の普及が絶えず必要な状況ですが、加えて臨床を支えるべきはずの基礎研究は未開の荒野に等しいです。確かにやるべきことはいくらでもあります。このような境遇のためか、僕の周りには井上教授をはじめとして使命を持って仕事をしている先生方がたくさんいらっしゃいます。使命を持って精力的に活動をしているとき、人は輝くのだと実感しています。

臨床は植田教授の下、研究は生理学教室の岩田

幸一教授の下で大学院時代を過ごしました。学生時代に何もしないまま通過していった生理学で一体何をやるのだろうか？とっていたある日、岩田教授が「嚥下って神経回路とか、ほとんどわかってないんだよね。誰かが調べないといけないね？」とおっしゃり、僕が「そうですね。誰かがやらないといけないですね。」と他人事のように答えたところ、「それじゃ、頑張ってお前が調べるしかないな。」と言われました。それからは肉体労働としか思えない日々を過ごすことになりました。知りたいことのためならばどんなに大変で時間がかかっても諦めずに行く、という岩田先生のスタンスは今では僕の研究に対する礎となっています。口腔生理学分野の准教授でいらっしゃる北川先生も当時日大にいらして、研究の相談に乗って頂いたり愚痴を聞いて頂いたりとお世話になりました。大学院時代は本当に何回もくじけそうになりましたが、その度に仲間を励まされ何とか乗り切ることができました。

早いもので、新潟に来てから1年が経ちます。就任した当初から失敗続きで医局の先生方にはご迷惑をおかけしていますが、こちらにきてから充実した日々を過ごせています。迷ったらやってみよう！がモットーなので、失敗はしても後悔しないという人生を歩んでいけたらと思っています。最後になりましたが、東京から新潟への移動も一人で決め好き勝手に生きているにも関わらず、文句も言わず応援してくれている家族に感謝しつつ筆を擱きたいと思います。

✧



医歯学総合病院・助教  
(歯の診療室)

金子 友 厚

この度、平成22年4月1日より、歯の診療室(口腔学学分野)の助教に就任いたしました金子と申します。出身は東京都三鷹市です。幼少期は東京の下町のひとつ港区麻布十番で過ごしました。都立

日比谷高校を卒業後、父親が群馬県前橋市の出身のこともあり平成元年群馬大学工学部化学系に進学いたしました。体育の授業では、ゴルフがあったのを覚えています。大学裏に馬の調教施設があったこともあり、学内に馬が歩いていたりして、当時はかなりのんびりとした学生生活を送っていたように記憶しております。ふとしたことから、歯学部への進学を志したのもこの頃です。そして、群馬大学を中退して平成2年東京医科歯科大学歯学部へ入学いたしました。学生時代は、家庭教師のバイト代を全てつぎ込み、東欧や北欧にビールを飲みに行くことを、楽しみに生活しておりました。当時の保存修復学臨床実習ライターが、現新潟大学う蝕学分野教授の興地隆史助手と、新潟大学歯学部出身の川島伸之助手だったこともあり、臨床系でありながら基礎研究の盛んな歯髄生物学分野（旧歯科第三保存学）へ、大学院生として入局いたしました。大学院生時代は、口腔病理学分野の高木実教授指導のもと、歯髄生物学分野の須田英明教授や興地隆史助手の助言を得ながら研究に勤しんでおりました。当時の研究テーマは、歯根肉芽腫における免疫担当細胞の抗原提示機能に関する研究でした。主として免疫染色や免疫電顕法を用いて樹状細胞やマクロファージなどの抗原提示細胞の抗体陽性反応や超微形態を観察しておりました。根尖病変の中にマクロファージとは異なる樹枝状形態の樹状細胞を発見したときの感動は今でも忘れません。大学院終了後10年間もの長

期にわたり須田英明先生の歯髄生物学分野に、引き続きお世話になり、さまざまな歯内治療学の術式をご指導賜りました。根管貼薬剤の主流がホルムクレゾールから水酸化カルシウムへと変わり、歯科用実体顕微鏡による歯内治療やNi-Tiロータリーファイルの常用化など、歯内治療の術式が大きく変わったのもこの頃です。途中、当時歯周病学分野教授の石川烈先生のご紹介もあって、2004年から2006年にわたり、米国ミシガン大学歯学部の Jacques E. Nör 助教授（現教授）のもとで研究に従事できる機会が得られました。当時の研究テーマは、口腔腫瘍の血管新生で、主に SCID マウスを用いて *in vivo* の実験をし、また培養細胞を用いて遺伝子発現を調べたりなどして研究を行っておりました。レーザー・キャプチャー・マイクロダイゼクションを用いた RNA 実験法もこのころ覚えました。この2年間の米国留学は、ミシガン大学が N.I.H. の研究費獲得額において米国1、2位を争う Research University のひとつだったこともあり、後の自分の研究や論文作成に、非常に良い影響を与えてくれたと思います。こうして、ふとしたご縁から新潟大学に参った次第ですが、これまでにご指導を賜った多くの先生方からの教訓を胸に、これからも精進してまいりたいと思っております。頑張りますので、どうぞご指導・ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

